

するための方法を提供することを目的としている。

—刊行物—

この研究所が刊行している次の資料には、国連商事法委員会、その他の国際機関における商事法務関係の活動ニュースや関連文書、そして、その邦訳等々が掲載されている。

○国際商事法務 1972.1～月刊

諸外国や国際機関における商事法の最新の動向、国際商取引に伴って生ずる法律の諸問題の解決指針等々が掲載されている。

○IBL マテリアルズ 不定期刊

同研究所会員のみ配布資料。国際商事法関係の海外の各種原資料を複写収録したもの。これら原資料は他では利

用できない重要資料を含んでいる。

○IBL ペリオディカルス

研究所附属の資料室に受入れられた外国雑誌40タイトルの目次をまとめたもの。年4回刊。会員配布。

—付記—

行政改革構想の一環として国は本年7月、主要政府諸機関（国際機関と関連をもつ機関をも含む）の大幅な機構改革を行った。詳細は次の資料に掲載されている。

「総務庁と十省庁の新機構スタート」
〔時の動き—政府の窓—〕 昭和59年7月号 p.18～43 所収

(いしかわ・こうじ 一般参考課)

探訪記

ビブリオテカ・ナショナル（マカオ）

82年2月早朝、香港フェリーでマカオに向った。目的はマカオの国立公共図書館ビブリオテカ・ナショナル (Biblioteca Nacional) 訪問である。簡単に考えていたが、これが意外と難物だった。それを暗示させるように、香港出発時のまずまずの天候が、途中風雨が強くなり、マカオ到着時はちょっとした暴風雨である。肌寒い悪天候の中、やっと車に乗り市中心部に向う。中央郵便局前で降り、通行人に尋ねるが誰も知らず、結局郵便局隣の移民局の忠告で、町はずれのマカオ国際大学を訪れ、ボルゲス事務局長に面会する。

同氏によると、訪問先のゴメズ国立図書館長は4年も前に鬼籍に入られ、現在

空席のままとのこと(その後、ヘンリケ・ロドリゲス・デ・センナ・フェルナンデス博士が館長に就任。World of Learning 1982-83)。所在を確認して、とにもかくにも市中心部の市庁舎2階にある同館を探しあてた。古色蒼然たる建物の裏階段を上ると、消えかかった文字ながら“Biblioteca Nacional”とある。入口に向かって若い二人の女性が無表情に坐っている。図書館の事情についてよく解らない様子で、勿論案内書の如きものはない。ポルトガル語、英仏両語を中心とする欧文図書約7万冊を所蔵する由であるが、窓から入る雨天の明りだけでは背表紙もろくに見えない。2階天井までぎっしりつまった書籍、それもほこりにまみれで、手にとると真黒になる。余程の覚悟をして来ないと調査は難しいと、痛感する。

(47ページへ続く)

WO 203 : War of 1939-1945, Military
Headquarters Papers, Far East

WO 208 : Directorate of Military
Intelligence

WO 235 : Judge Advocate General's
Office : War of 1939-45 : War
Crimes Papers

FO (Foreign Office) 371 : General
Correspondence, Political (Far
Eastern) Japan

保管資料総てが索引化され、個々にコード番号が付されている。資料請求には、レファレンス・ルームに置かれたコンピ

ュータ・ターミナルを使い、リーダーズ・チケット番号、座席番号、要求する文書のコード番号を入力すればよい。米国立公文書館において、目録類の整備が追いつかず、未だに資料発見にアーキヴィストの名人芸が幅を利かしているのと対照的である。

米国での収集資料との重複も目立つが、日本占領における英国の役割、英国軍による戦犯裁判等の検証に、PRO, Kew の関係資料は不可欠であり、近い将来における収集が期待される。

(連絡部国際協力課 千代正明)

(26ページより続く)

開架式で、2階壁面の図書は回廊に上って取り出すようになっている。階下はホール状の大閲覧室であるが、その時は一人の利用者も見当らなかつた。新刊書がほとんどない事も一因かも知れない。閲覧室の隣り、館員の奥の部屋に19世紀以来の官報が製本され、配架されている。そこには数か月前、ポルトガル本国から来た中年の女性研究者がいて、しきりとペンを走らせていた。

また市庁舎の背後の丘上には、「何東紀念図書館」(Biblioteca "Sir Robert Ho Tung")がある。蔵書は『永楽大典』など明本の写本に、洋装本を含め1,000冊程度に過ぎない。ちなみに何東(1862-1956)は香港の有名な大富豪で、教育や慈善事業面で貢献した。何でもビブリオテカ・ナショナルの館長は「何東図書館長」を兼任するようである。

結局、日本キリスト教史研究者として名高いテイシェイラ(Manuel Teixeira)

神父の話や、その紹介で訪問した「歴史文書館」での見聞でわかつたのは、戦前図書を所蔵するのが先のビブリオテカで、1945年以後の新刊書は、文書館に同居するビブリオテカ分館が担当することである。なお当文書館は本国政府の文書館から、マカオ関係部分をマイクロ資料で送付を受けている、とのこと。

図書館活動の沈滞ぶりは、それが位置する市中心街ですらその存在が忘れられていることから理解できる。官庁街の中央広場附近が舗装されているのみで、一歩外れると穴ぼこだらけの道路は水たまりだらけ。壁土も落ちかかり、軒を連ねた小店舗も薄暗く、貧弱な商品を高く並べている。道行く人—当然圧倒的に中国人だが—天気のおかげがあまり感ぜられない。過去の栄光を思い合せると、体の中を薄ら寒い一陣の風が通り抜ける感じであった。

(アジア・アフリカ課 中林隆明)